

日本人とアイデンティティーと船



(財) リバーフロント整備センター 理事長 竹村 公太郎

分裂しなかった日本人

1853年、米国ペリー提督率いる黒船が、浦賀沖に姿を現した。激動の時代の幕が開かれた。

欧米列国は次々とアジアを植民地化し、日本への包囲網を狭めていた。

欧米列国がアフリカやアジアを植民地にしてきた手法は「分割して、統治する」であった。すなわち、地域間の人々の不信を深め、国の一体感を裂き、国内の分裂を広げることであった。それが、植民地支配する側にとって最もリスクが少なく、最も効率良かった。

欧米列国は、幕末の日本でも同じ手法をとった。英国は薩長の倒幕を支援し、仏国は幕府の武力抗戦を支援した。日本国内が二分される内戦が勃発すると思われたその時、欧米列国にとって予想もできない事態が出現した。

1867年、徳川幕府は、突如として統治権を朝廷に差し出す「大政奉還」を行ったのだ。2世紀半、絶対権力を誇っていた徳川幕府が、一瞬にして姿を消し、天皇を中心とする新しい政治体制が、あっという間に出現した。その後、鳥羽伏見の戦や戊辰戦争があったが、全体から見れば局地的な戦いでしかなかった。

日本は国内分裂と植民地化の危機を脱し、幕藩封建体制から国民国家へと変身し、富国強兵の旗のもと工業国家を実現し、世界最後の帝国に滑り込んで行った。

何故、日本人は分裂しなかったのか。それは、日本人は日本に対する強固なアイデンティティーを持っていたからだ。

日本人の強いアイデンティティーは、江戸時代に醸成されていた。

日本列島の分断された土地

日本は、南北に細長い島国である。北海道から九州までだけでも2000kmもある。細長いだけではない。列島中央には、脊梁山脈が走っている。この山脈から太平洋と日本海に向かって、無数の川が流れ下っている。

日本の各地は、この海峡と山々と川で分断されていた。

人々は分断された土地で、稲作を続けていた。この日本列島での米作りは、困難を極めた。何しろ米作りの期間は、4月から9月である。その半年間には、日照りの旱魃があり、大雨の洪水も襲ってきた。

人々は力を合わせて用水路を掘り、水を引いた。堤防を固めて、洪水から住居や農地を守った。冬には冬で、春の農作業の準備が山のようにあった。農具を作り、それを改良し、草鞋や蓑を編み、苗の下ごしらえをした。

稲作を始めた日本人たちは、土地から離れるわけにはいかなかった。山々と海峡と川に分断された土

地にへばりつくようにして生きた人々、それが近代化以前の日本人であった。

世界のどこでも、分断された土地の人々は異なる言葉を話し、異なる物語と文化を持った。なぜなら、他のコミュニティとの差を付けることが、自分自身たちのコミュニティのアイデンティティーであった。

ところが、細長い日本列島で、地形に分断されていた日本人たちは、同じ言葉を話し、同じ物語を共有し、同じ文化を身にまとっていた。同じ言葉、同じ物語、同じ文化を持つ一体感がアイデンティティーである。

近代化以前、分断された土地に生きていた日本人たちは強い一体感をもっていたのだ。

モノは情報

江戸時代、江戸を中心にして日本列島中のモノが激しく行き交っていた。

幕府が置かれ、全国の諸大名が住む江戸は途方もない物量を必要とした。江戸に住む武士階層は消費集団であった。国許から特産品を取り寄せ、それを金品と交換した。全国各地の米、海産物、木材、特産品そして工芸品が、毎日、休むことなく江戸に注入された。

江戸に注入されるだけではない。江戸からは浮世絵、瓦版、雑誌、着物、装飾品、流行の布生地が送り出された。

全国からモノが江戸に集まり、江戸で混ざり合い、そして、全国へモノが送り出された。江戸は日本列島のモノのミキサーであった。

そのモノの移動を支えたのが、船であった。山々と海峡と川で分断された日本では、陸上交通は発達しなかった。モノの行き交いは船によって行われた。

モノは単なる物体ではない。それは情報と文化の塊であった。列島各地の日本人は、未だ見ぬ土地の人々が作ったモノに見入った。その美しさ、その面白さ、その便利さに感嘆の声を上げた。日本人たちは、モノを手にして見知らぬ土地を語り、モノを送り出した江戸の話に弾んだ。

人々はモノを通して、日本人の知恵と芸術と歴史を共有していった。

ラジオやテレビがない江戸時代、各地の日本人はモノを共有することで、日本への一体感を醸成していった。

それを支えたのが、水運であった。

19世紀、欧米列国に囲まれた危機にあって、日本人は日本人としての一体感、つまりアイデンティティーを持っていたからこそ、日本は分裂せず植民地にならなかった。

その日本人のアイデンティティーを育んだものは、モノを運び、情報を運んだ「水運」であった。